

ガンバライダーロード Ep. 戦姫絶唱シンフォギア

霸王ライダー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガンバライダーロード、e p シンフォギア あらすじ
ガンバライジング社元社長”檀黎斗に召集されたロード、ノヴェム、デイバイド。

残っていたデータによるとどうも並行世界でガンバライダーたちが消失する事件が起きているとのこと

その消滅の仕方も特殊なため、これまで任務をこなしてきた彼らに頼みたいということだった。

無論、これまで良いように使われてきたロードからしてみればそれを信じることはなく、一蹴する。

しかしその現象に興味を持ったノヴェム、他者が困っていることを放って置けないデイバイドはロードを説得する。

そして裏に動くショツカーの影を発見していると檀は告げる。

財団Xと関わったロードはショツカーを倒せば彼らの足取りを掴めるかもしれないとこのミッションへの参加を承諾した。

一方シンフォギアの世界では街を守る特異災害対策機動部二課と未知の組織「ショツカー」と対峙することとなり、対策すら出来ない力に翻弄される。

これまで彼女たちが戦ってきた「ノイズ」や「聖遺物」とは違う力、そして強い力で彼女たちを圧倒していく。

目的すら分からず力を振るうショツカーたちに困惑しながらも装者たちは戦いを続ける。

そんな中街に侵攻したことを知ったガングニール装者「立花 響」は幼馴染である「小日向 未来」を助けに向かうべく戦線を街へと移行した。

そして、危機に陥ったシンフォギア装者たち、未来を救出した響にトドメを刺そうとしたその時、赤い閃光がショットカーを打ち倒した。

そして彼らは名乗る。「ガンバライダー」と

p s . 1 話だけ書いたので好評であれば続き書こうと思います

目次

第2話	7
第1話	1

第1話

―特異災害対策機動部二課―

この世界に存在し人間に害を成す「ノイズ」と戦うべく結成された部隊である。

しかし、彼女たちに今回課せられた任務はノイズではなかった。突然の非常事態に鳴り響くサイレンの中、彼はいた。

―風鳴源十郎―二課の責任者であり、ここを守る要でもある

「一課から通達!!今回の一件はこちらで対処せよとのこと。」

「なんだと!?!」

妙な話だった。二課にノイズの一件しか任せなかった一課が今回のこの一件をこちらに託そうというのだ。

どういうつもりなのか源十郎にも見当がつかない。

「立花くんたちは?」

「現在いる場所で各所戦闘体制です。」

「よし、住民を避難させつつ戦闘開始!こちらもカバーするぞ!」

源十郎の指示に皆が動いていく。源十郎を心配そうにモニターを眺めた。

これがこれから始まる戦いの序章など誰も知る由はなかった。

各所で戦っていた戦士たちは徐々に集まり一つに纏まっていた。

「なんだ…コイツら。」

「ノイズじゃない…。」

―シンフォギア―を纏う少女たちの前に一人の男が堂々と歩いてくる。彼女たちにもその男が相当のクラスにいることは一瞬で判断できた。

「悪いがこの世界は大ショッカーがいただく。その為には君たちがちと邪魔のようでね。」

「誰から知らないが」

「そんなことさせないデス!!」

シンフォギア装者である風鳴と暁が武器を構えるとそれぞれの武器を構えた。

「まあ、君たちが邪魔なのだから戦闘態勢になつてもらえると助かるよ。」

男のベルトは発光し、一瞬でその姿を銀色の鎧へと変えた。

「我ら大シヨツカーの英雄”シャドームーン”が相手しよう。」

シャドームーンが手を挙げると後ろにいた怪人たちが一斉に走り出した。それに合わせて装者たちはより一層強く武器を握った。

「絶対にここで食い止めましょう!!」

「ええ。そうね!」

マリアがそう答えて剣を振るうと、その攻撃で敵は吹き飛んでいく。それに続くように立花はまつすぐな拳を振るった。

「貴様の相手は私だ!!」

「っ!!」

立花の拳はシャドームーンによつて止められ、そのまま前に突き飛ばされた。

「何が目的なんですか!？」

「君のような知性の低い存在には到底理解できないよ。」

「なっ……。」

「立花!!」

立花の拳は一瞬止まると、風鳴からの檄が飛ぶ。

「今はそんなことを気にしている場合じゃない!先に奴を叩くぞ!!」

「分かっています!!バカは生まれつきなので!」

その考えはいささか疑問ではあるのだが……。少しの不安を抱えながら風鳴は離れていった。

戦場ではそれぞれの装者の歌が響き渡り、それぞれのメロディーが奏でられていく。

「調!!」

「いこう切ちゃん。」

暁と月読は見事な連携でシヨツカーの怪人たちを切り刻んでいく。

「雪音!」

「何だ!？」

「こいつらは一体なんだ!？」

「知ってりや答えてんだろ!!」

雪音が風鳴の質問にそう答えると雪音はガトリングを撃ち鳴らすと敵は一気に風穴とともに吹き飛んでいく。

「しかしこれだけの数を一気に呼び出せるとは……ショッカーとやらは只者ではなさそうだな。」

そう風鳴が呟くと彼女の剣が鞘から抜かれ、一気に切り裂いていく。

「っ!!」

「なっ?」

その刹那、雪音の放ったミサイルが敵に届かぬまま目にも留まらぬ速さで爆破していく。その爆風で二人は後ろへと退けた。

「何だ……?」

「っ!!雪音!!」

雪音を突き飛ばした押しした風鳴は殴り飛ばされ、そのまま地面に這いつくばった。

「どうなってるんだ?」

「俺のクロックアップについてこれるものなどいない。」

雪音もその声が聞こえた瞬間、殴り飛ばされてそのまま地面に倒れこんだ。

「っ……!!」

雪音が目を向けるとそこには黄色の鎧を纏い、黒い複眼が光る戦士がそこにいた。

「これでトドメというか。」

” Clock up ”

Clock over”

一瞬で近づくと、雪音の首元に一本の針を近づけた。

” ライダー スティング ”

「雪音!!」

ほぼゼロ距離で逃げても相手に追う手段がある為避けられるはずがない。

終わりだ。戦士はそうほくそ笑み、終わりを悟った雪音が目を瞑つ

たその時だった。

” Clock up ”

「つたく、諦めちゃ何も見えなくなるぜ？」

” Clock over ”

刹那、雪音の喉元へと近づいた針は見えず、黒い複眼の戦士はそのまま地を這うように強く地面を握りしめた。

「こいつは・・・？」

「あなたは・・・？」

彼女たちの目の前にいたのは赤い鎧を纏い、彼とはまた違った輝きを放つ目をしていた。

「貴様は・・・」

「俺たちはガンバライダー。ショッカーを狩りに来た。」

「街にもショッカーは向かっている。征服も時間の問題だな!!」

「っ!!」

立花はその瞬間シャドームーンを押し切り、街の方へと目を向けた。

「未来が危ない・・・!!」

向かおうとした瞬間、ショッカーの怪人たちが壁のように立ちはだかった。

「どおおおおおおおけええええええええええ!!」

アームの力は増していき、怪人たちを吹き飛ばしていく。

「待て!!」

追おうとするシャドームーンへとマリアが剣を向けた。

「あなたの相手は私よ？」

「ちっ・・・。ならばよろしい。」

シャドームーンは舌打ちをするもマリアへと赤い剣を向けた。

街に着くと、そこには怪人と逃げ惑う人々がごちゃごちゃになっていた。

「ごんな・・・。」

ボロボロにされていく街を見て立花は少しばかり呆然とした。だが、すぐに自分のすべきことを思い出した。

「未来!!」

足のエンジンを点火させると怪人たちを突き飛ばしながら一気に駆け抜けていく。

立花はふと気配を感じ取り、後ろを向いた。どこかで彼女の叫んだ声がしたような気がするのだ。

立花はさらに加速してスピードを高めて行く。

河原に着くとそこに彼女はいた。

「未来!!」

既に囲まれており、彼女を救うには自分一人では対処は不可能という判断はできた。

だが、そんなことを気にしている場合ではない。自分の大切な親友が危機に迫っているのだ。立花は一気に点火させて走り抜けると、小日向の手を掴んだ。

「未来!!もう大丈夫だからね!」

「うん!・・・でも」

助けたはいいものの彼女たちにここから脱出という手段を許してはくれそうにない。

「響・・・」

小日向の強く握りしめた手の感覚が伝わってくる。彼女も怖い。でも自分がなんとかしないと。

そう駆け抜けようとしたその時だった。

「まだ諦めない姿勢。僕は嫌いじゃないな!」

赤く光る流星が立花たちの周囲を回り、瞬く間に怪人たちを爆発四散させた。

「あなたは・・・?」

赤い鎧を纏い、緑色に輝く目をした戦士は立花たちに手を差し伸ばした。

「僕はガンバライダー”ロード”。今は味方と思ってもらって構わない。」

「は・・・はい。」

立花はロードは握手を交わしてそのままロードの手に引かれたま

ま戦地へと赴くのだった。

第2話

立花たちの前に現れたのはガンバライダーと名乗る赤い戦士だった。

「えーと・・・。」

「ロードでいっよ。」

ロードはそう立花に言うとう自分の持つ端末を手に取った。

立花はフラつく小日向を支えながら立ち上がった。彼女の体力も限界にきていることを考えると相当の距離を走ったことが伺える。

小日向はロードの元へと向かうと、一礼した。

「助けてもらってありがとうございますー！」

ロードは気にしない。と手を横に振った。

「気にしないから大丈夫だよ。もつとも、僕のもう一人の人格なら偉ぶってたかもだけど。」

「もう一人の人格?」

小日向がそう返すとロードは何でもない。そう苦し紛れ彼女に笑みを返した。

小日向に続いて立花も一礼してロードへと歩み寄った。

「翼さんたちは?」

「僕の仲間が助けに向かっている。もうすぐ戦闘も終わるんじゃないかな?」

そう聞いた立花に言葉を返したロードがモニターを開くと、彼に似た赤い複眼の戦士が映っていた。

「チヒロ、もう終わるかい?」

「終わるわけあるか!!」

チヒロに間髪入れず言われると、ロードは一步後ろに引いた。

「うるさいからうるさいから」

「うるさくもなるだろ!今着いたばっかだぞ!」

そのモニターを眺める立花と小日向はどうしたものかと首をかしげる。

たしかに形状は微妙に違うものの、全く同じ声の人間同士が喧嘩し

ているのだ。

その似せ具合は兄弟同士などではなく自分一人で会話しているようだった。

チヒロが戦っていたのは仮面ライダーザビー。ZECTの作り出したクロックアップシステムを持つ仮面ライダーだった。

ロードに文句を言いながらチヒロはザビーの攻撃を片手でいなしていく。その姿は余裕そのものだった。

ザビーのパンチを後ろ回し蹴りで弾き飛ばすとそのまま回り終わった後に首を回した。

「お前は・・・!?!」

雪音がそう問うとチヒロは彼女に手を伸ばした。

「俺たちはコイツらを潰すためにきた。つまり今は味方って話だ。」

雪音はその手を取って立ち上がった。赤い戦士は少し強めに雪音の手を引っ張って持ち上げた。

「あいつらも仲間か?」

「ああ、あの青いのも白いのも仲間だ。」

雪音へとそう雑に説明すると、マリアに加勢するしてシャドームーンとは青い戦士が戦っていた。

マリアとの戦いに参戦した青い戦士はシャドームーンへと余裕の態度で来いよ。と手招きを加えた。

「あなたは?」

「僕の名前はノヴェム。彼らと同じ味方さ。」

ノヴェムと名乗る戦士はシャドームーンの攻撃を鮮やかに躲していく。

シャドームーンに一つも指すら触れていないものの、彼との実力の差を圧倒的に見せつけた。

「貴様、ガンバライダーか。」

シャドームーンの疑問にノヴェムは答える。

「ご名答。僕らを知ってるってことはここから派生したわけではなさそうだね。」

シャドームーンは剣を振るうが、青いガンバライダーはそれを全く

寄せ付けない。

その間に入れないマリアは呆然と彼らの戦いを見ることしかできなかった。

シャドームーンの剣を片手で防ぐとマリアの方へ顔を向けた。

「今のうちにー！」

「えっ!？」

慌てるマリアへノヴェムは優しく問いかける。

「君が今成すべきことはなんだい？守りたいものは？」

その瞬間に抑えられていたシャドームーンはマリアのいる方向へと突き飛ばされた。

マリアはハツとなってその銀腕でシャドームーンの溝内に拳を入れるとそのままシャドームーンは吹き飛び、ビルに叩きつけられた。

そのビルにはシャドームーンの埋まった跡が残された。

「ガハッ・・・!!」

叩きつけられたシャドームーンはゆっくりと去ろうとする。しかし、ノヴェムは何発か銃撃を加えた。

「マズイ・・・。」

ノヴェムはもう何発か射撃を加えるがシャドームーンは歩き続け、灰色の壁の中へと姿を消した。

「逃げられたか・・・致し方なしだね。」

ノヴェムはマリアへと手を差し伸ばした。彼からハイタッチを求められているようだった。

「ナイスプレー。」

「・・・ええ。」

マリアはそのハイタッチに答えてハイタッチすると、フフツ。と青い戦士は笑みをこぼした。

「つたく、ノヴェムの奴かつこつけやがって。」

チヒロは雪音をかばいながらザビーへと攻撃を加えていく。彼と黄色い複眼の戦士の差は歴然としていた。

「くっ・・・。」

「これで終わりか？ZECTの仮面ライダーも大したことねえな。」

「っ!!」

ザビーが怒りを表して攻撃しようとしたその瞬間だった。

「この私が相手にいることを忘れるな!」

そう言いザビーを烈火の一撃が襲う。その一撃は風鳴の風林火山であり、剣を回転させ纏った炎を使って切り裂く技である。

背中から斬撃を受けたザビーはそのまま吹き飛んで倒れ込んだ。

風鳴の通った後には炎の焼き焦げた跡が地面に付いていた。

「サンキュー。」

「例にも及ばない。」

チヒロと風鳴はそう言って肩を並べる。雪音は立ち上がって、その間に入った。

「だったらあんたらの弾幕は任せな。」

「ああ、任せたぞ雪音!」

そう言って風鳴と雪音とチヒロはそれぞれ分かれて戦闘へと向かった。

一方で暁と月読のところに向かっていたのは白いガンバライダーだった。

「あなたは・・・?」

月読の言葉に白いガンバライダーは声の方向に振り向いた。

「私はガンバライダー」 デイバイド”。あなたたちの援軍に来ました。」

その声と仕草から二人でも相手が年上の女性だということがすぐわかった。

デイバイドは周囲にいた怪人たちに拳を振るっていく。

「じゃあ、とっておきいきますね!」

デイバイドはベルトから一枚のカードを取り出すと、それをもう一度装填した。

「どうなってるデスか!?!」

そう言ってデイバイドが光を纏うとその光からデイバイドは分裂し、二人になっていた。

「二人に」

「なったのデース……。」

二人になったデイバイドは背中合わせになりそのまま足に雷を纏ったまま走っていく。月読と暁はそれを呆然と見つめる。

「ライジングマイティキック!!」

敵は吹き飛び、そこから二人の見る範囲では周囲の敵は爆散していた。

「今のは?」

暁の言葉にデイバイドは近寄って頭を撫でた。

「あれはライジングマイティキック。半径3kmは吹き飛ばす技です。」

「は……はんけ……。」

驚く二人にデイバイドは笑ってみせた。

「大丈夫ですよ。皆さんに危害は加えませんし。」

そう言っつてデイバイドも通信を開く。そこにはノヴェム、ロード、チヒロの姿があった。

「終わったか?」

「ああ、こっちはなんとか。」

デイバイドの周囲の煙を見て全員が彼女の使った技が大方察せる。恐らく3kmは地面が削れているだろう。

「……これは報告書もんだね。」

ノヴェムがそう肩を落としたようにそう言うとチヒロが肩を叩く。

「俺たちはもう関係ねえんだし良いんじゃないやねえか?」

そうだったとノヴェムがすぐめた肩を立て直した。雪音たちが見る限りでも彼らはどうも訳ありでこちらに来たことが伺えた。

「お前らは一体……?」

三人がベルトを外して変身解除すると、そこには二人の男性、そしてモニターには一人の女性が映った。

「……アレ?」

響たちの目の前にいたロードと名乗るガンバライダーは彼女たちの前から消失し、その姿を完全に消した。

「ロードさんは?」

チヒロは自分を指差した。響たちはその動きからチヒロ、そしてロードの言いたいことが直ぐに理解できた。

「じゃあさつき言ってたもう一人の人格って」

「そういうことだ。俺とロードは二人で一人。」

そして一瞬にしてさつきまでの冷淡な目は少し朗らかな優しい目に変わった。

「あんまり説明してなくてごめんね。僕らも時間がなかったもんだから。」

いいえ。と二人は軽く断りを入れて話を続けた。

「あなたたちの目的って何ですか？」

「その前にいいかしら？」

マリアが割って入ると、三人に少しずつ歩み寄った。三人もまたマリアの方を向いた。

「あなたたちの戦いぶり、そして助けてくれたことは見事だったし感謝してる。でも、本当にあなたたちを信じていいのかしら？」

「マリア!？」

風鳴が止めようとするすると雪音は行こうとする風鳴を止めた。

「あなたたちはショッカーが現れて少ししてからこの場所に来た。あまりにも偶然と言うには弱いんじゃないかしら？」

マリアの言葉に口を出すものはいなかった。静まり返った時、ロードが口を開いた。

「僕らがここに来た意味を聞いた上で判断してくれればいい。それでも信じられないのであればそれまでの話だろう？」

マリアは納得したのか少し頷いてから後ろへ下がった。

下がったことを確認するとノヴェムたちはそれぞれ目を合わせた。話そう。彼らがここに来た意味、そしてこれから為さねばならぬことを。

—ある日のことだった—

GRZ社を脱退した檀 黎斗はもともと父が経営していたゲーム・コーポレーションを継ぐこととなった。

そんな彼が継いでから1ヶ月もしない頃だった。

GRZ社から実質上の脱退を喰らったチヒロたちはゲナム・コーポレーションの社長室にいた。

「何の用だ。」

ノヴェムたちが行儀よく座る中、チヒロはガラスの壁にもたれかかって檀に鋭い目つきを向けた。

「そんな鋭い目つきを向けなくてくれ。君たちには協力を要請したいだけなんだ。」

無論、そんなことを一言で言っただけで信じるほど彼らと信頼度があるわけじゃないことは檀も悟っていた。

三人が疑問符を浮かべる中話は続いた。

彼の話はこうだ。

GRZ社に所属していた三人のガンバライダーがある世界に向かった時、そこで消息不明となり消えたという。

勿論他のガンバライダーも何人か捜索に向かったものの帰ってくるものは一人もいなかったらしい。

そこには悪の組織”シヨツカー”が絡んでいるらしく、彼らの手に負えないので三人の実力を買って是非戦ってほしい。ということだ。

「やだね。」

チヒロは長々と話を聞いた上でキツパリそう言った。九重は何か言いたげにしたが、彼の意見に返すことは出来なかった。

心配じゃないわけじゃない。仲間が消息不明になっていく様をチヒロはともかく九重は放っておけるような性格ではない。

しかし何故脱退した彼からそんな依頼が来るのか、そして何故彼が今になってチヒロや自分に告げたのか。そこだけがどうしても引つかかったのだ。

「でもチヒロさんー！」

止めようとしている広瀬の声も聞こえていない。チヒロがその場を去ろうとしたその時だった。

「君がドライバーを託した財団Xがシヨツカーの裏で働いているかもしれない。と言っただけか？」

チヒロの足は止まった。

―財団X―

裏組織では有名な財団であり、怪人は勿論、超常犯罪などに多く携わっている所謂“悪の組織”である。

チヒロたちはかつて彼らにガンバドライバーの情報を渡し、その影響でポケットモンスターの世界にいたクリスタル、ルビー、サファイアやその他の人たちに多くの被害を与えた。

ロードは人格内でチヒロへと問いかけた。

「チヒロ、これは彼の罠だ。君を向かわせるための」

「それでも、またサファイアたちみたいなの人間が、被害者が出ることを避けられないなら戦う意味はあるだろ。」

ロードはため息をついた。彼が一つ決めたことが生まれると、そうそうに退かないことを彼も知っていたからだ。

ロードが静かに奥底に隠れると、チヒロは檀へと近づいた。

「上等だ。ショッカーも財団Xも俺がぶった斬る。」

九重はホツとした。これで一つでも世界が救われるのならどうであれ良いんじゃないかと。

一通りの経緯を話し終わると、チヒロは瓦礫を軽く蹴ってマリアたちの方を向いた。彼の冷淡な目は鋭く、意図していなくても睨みつけているように見える。

「俺の目的はあくまで財団Xだ。そこに行き着くために戦う。」

天邪鬼が。九重はそう思いながらチヒロへと近づいた。

「それに向かうにしてもショッカーは倒さなきゃいけないって話さ。」

「それは分かったんですけど」

小日向がチヒロへと声をかけた。チヒロはその冷淡な目のまま小日向の方を向いた。

「なんでこの世界って分かったんですか？これまで反応もなかったみたいですし。」

チヒロはパネルを開き、三人のガンバライダーの映像を流した。そこには三人のガンバライダーと何体かの怪人が戦っていた。

「ガンバライダー名“ゲニウス”、“アニマ”、“メイス”。この三人に付けられていた発信機がこの世界で途切れていることが確認され

てる。」

「世界が妥当なんじゃないか？という話になったんです。なるほど。と装者たちは納得する。」

「これだけ意味があるんだもの。信用しないのは酷ね。」

マリアがそういうと、後ろにいた暁と月読も頷く。

風鳴と雪音も思わず笑みをこぼすと立花がチヒロへと声をかける。

「あと疑問なんですけど、何で服がボロボロなんですか!？」

「このバカ！全員がツッコミを入れようとするとノヴェムとチヒロは軽く笑みをこぼした。」

「ほら、いつの日か言われるって言ったじゃん。」

「しゃーねーだろ服なんて興味ねえんだから!」

二人が笑みをこぼしている様を見て風鳴とマリアは思った。

”なんだ、普通に笑えるんじゃないか”